大学生の認知的ソーシャル・キャピタルに関する質的調査

芳賀道匡¹・松浦隆信²・山川 樹¹・本山友衣¹・坂本真士³

(¹ 日本大学大学院文学研究科・² 立正大学心理学部・³ 日本大学文理学部)

キーワード：認知的ソーシャル・キャピタル，大学生

The categorical study for cognitive social capital among university students

Michimasa HAGA¹, Takanobu MATUURA², Itsuki YAMAKAWA¹, Yui MOTOYAMA¹, Shinji SAKAMOTO³

(¹ Graduate School of Literature and Social Sciences, Nihon University, ² Faculty of Psychology, Risscho University, ³ College of Humanities and Sciences, Nihon University)

Key Words: Cognitive social capital, University students

目 的

認知的ソーシャル・キャピタル（以下認知的 SC）は、個人が所属する集団とのつながりや身のまわりの社会環境から得る心理社会的リソースをさす。個人の受け与えを測定するソーシャル・サポートと比べ、互酬性などを扱っている点において広い概念であるとされる（Cagney & Wen, 2008）。認知的 SC は精神的健康と関連があることが先行研究において示されているが、扱われている指標について一般的信頼のみ、あるいはソーシャル・サポートを含めて認知的 SC と呼称するなどコンセンサスが得られておらず検討の余地がある。本研究では大学生の認知的 SC を構成する諸概念の検討を目的に、半構造化インタビューを行った。

方 法

調査者 臨床心理士である大学院生 1 名。

調査対象者 東京の私立大学に通う大学生に調査を依頼し、承諾を得た 12 名（男子：女子 = 8：4）に半構造化インタビューを行った。まずインタビューの事前に描いてきてもらったパーソナル・ネットワーク図をもとに、調査対象者と関連のある複数の集まりについてインタビューを行った。インタビュー時間は 40～80 分であった。

調査材料 ①半構造化 SC 調査項目を使用した。SC の先行研究を基に作成されたインタビュー項目であり、臨床心理学を専門とする大学教員によって項目の妥当性が確認された。質問項目は、集まりの活動内容について・集まりとのつながりを感じる TPO・集まりへの期待・集まりへしていることやしたいこと・集まりにあるきまりやルールであった。②パーソナル・ネットワーク図（Figure1）を使用した。半構造化インタビューの事前に作成してもらい、対象者が話す内容を明確化し、インタビューを円滑に進めるために用いた。

分析手続き 心理学を専攻する大学院生 3 名によって KJ 法が行われた。KJ 法は調査対象者の大学生のつながりを感じている集まり（大学クラス、サークルや部活、家族、バイト先、小・中学の友人、高校の友人、その他の集まり）それぞれで行い、最後に共通する要素を抽出した。

結果と考察

すべての集まりに共通した成分として、ネットワーク・社会的絆・信頼・互酬性があげられた（Table1）。大学生の認知的 SC は複数の成分で構成されていることが示唆された。

インタビューにおいて、ある調査対象者は所属するサークル集団のネットワークを通じて他大学のサークル集団と関わっていることについて話していた。集まる際の準備を通して、同じ苦勞をしながらつながりを感じられるようになったことや、様々な個性をもった人間が他の大学にいて話すことが楽しいことを報告していた。報告からは、信頼やサポートの他にもネットワークを構成するメンバーの異質性や他集団への

アクセス可能性の高さ、社会的絆の向上が認められる。これらは各々が心理社会的リソースとして認知的 SC を規定していると考えられる。したがって、大学生の認知的 SC を単一の指標によって測定することは、他の重要な要素の測定を欠落させてしまう可能性が示唆された。

また、ネットワーク図にあげられた集まりを集計したところ、大学クラス 92%，サークルや部活 42%，家族 42%，バイト 75%，小・中学の友人 50%，高校の友人 42%，その他の集まり 25%がつながりを感じる集まりとしてあげられた。先行研究を概観すると、高齢者や一般住民を対象とした研究のように近隣地域に関する SC のみを測定している研究や、児童青年を対象とした研究のように学校に関する SC と両方を測定している研究がある（De Silva, 2005）。本研究では学校場面の集まりとのつながりがすべての調査対象者から報告されていた。したがって、大学生の SC に関する研究を行う際には児童青年と同様に、地域の SC のほかに主要な生活場面となる学校の SC に焦点を当てる必要があると考えられた。

引用文献

- Cagney, A. K., & Wen, M. (2008). Social Capital and Aging-Related Outcomes. Kawachi, I., Subramanian, S.V., & Kim, D (Ed). *Social Capital AND Health*. New York: springer. pp.239-258.
- De Silva, M. (2005). A systematic review of the methods used in studies of social capital and mental health. *Journal of Epidemiology & Community Health*, 9, 619-627.

Figure1 パーソナル・ネットワークの図示の例

Table1 大学生の認知的 SC の要素と成分

認知的SCの要素	よく集まる仲間における各々の成分
ネットワーク	活動内容、会う頻度・状況、集まりの形態
社会的絆(親密性)	集まりの差別化、疎遠・関係の変化、距離を感じる、集まりの仲の良さ、集まりの一体感
信頼	信頼
互酬性	集まりから得られる報酬、サポート、相互扶助、協力、情報の共有、助け合い、高め合い、いじり・指摘